

大きな聖堂の小さな町

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻教授

いとう たけし
伊藤 毅

クワイヤー・ボーイズ

「クワイヤー・ボーイズ」という名前をお聞きになったことはあるだろうか。2005年11月にイギリスで結成された少年3人からなるコーラス・グループである。イギリスは合唱王国といわれるぐらいコーラスが盛んで、コンテストや大会が各地で行われている。なかでもクワイヤー・ボーイズは全国の聖歌隊の選りすぐり数百人のボーイソプラノからオーディションで選ばれた3人組で、サウスウェル大聖堂聖歌隊のベン・インマン(12歳)、イーリー大聖堂聖歌隊のパトリック・アスベリー(12歳)とCJ・ポーター・ソウ(10歳)からなる(写真-1)。このうち2人のオーディション合格者を出したイーリー大聖堂聖歌隊は、数ある聖歌隊のなかでもイギリス屈指の名門聖歌隊の一つとしてその名はつとに知られている。

写真-1 クワイヤーボーイズ(CDアルバムのジャケットから)



さて、この聖歌隊の活動拠点であるイーリー大聖堂、この教会は西洋建築史におけるイギリス・ロマネスクやゴシック教会堂の項目で必ず取り上げられる超メジャーな建築であって、大学町ケンブリッジの北東約25キロメートルにあるイーリー(Ely)という小さな町に聳え立っている。今回はこのイーリーという魅力的な中世都市を紹介しよう。

小さなシティ

イーリーはとにかく小さな町だ。イングランド全体で、「シティ(City)」と認定されている都市でもっとも人口が少ないのが、シティ・オブ・ロンドン。いうまでもなくロンドン発祥の地であり、その後もずっとロンドンの金融・業務の中核として繁栄してきた場所だから、居住人口が少ないのは当たり前である。これを除くと、実質的にもっとも小さな町はサマセット州のウェ

ルズ(Wells)になる(人口約1万1000人)。そしてその次に小さいのがここで取り上げるイーリーなのである。イングランドで3番目に小さいシティということになる(ウェルズ、アイルランドを入ると第6位)。人口わずか1万5000人で町の周囲にはのんびりした田園風景が広がっているが、れっきとした「シティ」なのである(図-1)。

イギリスでシティのステータスを獲得するためには英国王の認定が必要となる。これは都市の規模や人口などの数量的な指標で認定されることはなく、教区におけるその町の由緒やコミュニティの伝統などが重要な判定基準になる。だからイーリーのように小さな町でもシティの要件を満たすことがありうるのだ。しかもイーリーは後で述べるように司教座が置かれた町であったから、その都市としての格式はきわめて高

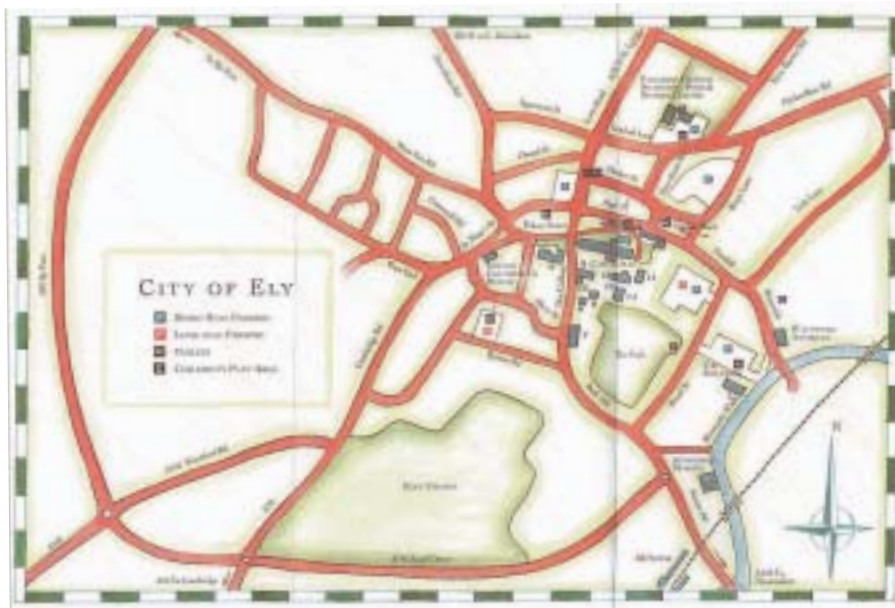


図-1 イーリー地図

い。ちなみにウェルズもイーリーと同様、小さな教会町(Cathedral City)として有名である。

● 沼地の巨大船

イーリーの歴史は7世紀に遡る。すなわち、サクソンの王女だったエゼルドレダは意に沿わぬ2度の政略結婚を強いられたが、神への信仰を失わず、2度目の結婚から解放されるとイーリー島に逃れ、673年修道院を開設した。当時イーリー一帯は沼地であったが、そこに島状の高台があり、イーリー島と呼んでいた。イーリーの語源はeel(うなぎ)+y(島)にあると伝え、周辺の湿地帯にはたくさんのうなぎが生息していたという。18世紀に水が干上がるまで沼地のままであった。

この修道院はエゼルドレダの死後、870年デン人への侵略によって破壊され、しばらく廃絶していたが、10世紀に入るとベネディクト会によって再興され、その後何世紀もの間無数の清教徒が訪れる「メッカ」として栄えた。

1109年、当時の修道院長シモンのリーダーシップによって、ここに司教座が置かれることになり、修道院から大聖堂へ

と一挙に格上げされることになった。これがイーリー大聖堂(Ely Cathedral)である(写真-2)。

建設はノルマン王朝成立後の1083年、内陣を再建することからスタートし、これは1106年に完成した。続いて交差廊と外陣工事に取組み、外陣は1180年頃、西交差廊をもつ西正面とポーチが13世紀初頃にできあがる。交差部には当初塔屋が立てられたが1322年に倒壊し、それを機に大聖堂の役

写真-2 イーリー大聖堂





写真-3 交差部の八角塔屋

員の一人、ウォルジンガムのアランが交差部を八角形に改めた。13世紀までの十字交差部は単純な矩形に過ぎなかったが、このアランの試みは新たな造形への可能性を拓いたといえる。この八角形

の上には木造の採光塔が立ち上がるが、下部の石造八角形に対して22.5度(八角形の軸交差角45度の半分)回転させるように置かれたため、多方向から光がふり注ぐ幻想的な空間が現出することになった。イーリー大聖堂の最大の見せ場である(写真-3)。

当初の内陣はアプスに4つのベイを加えた規模だったが、1232～52年に現在のように拡張された。その結果、内陣(側廊を含む)は24メートル×73メートルという長大なものになり、内陣の天井高さは32メートルに及んだ。柱は床から天井まで一気に立ち上がり、木造天井には極彩色の天井画が描かれる(写真-4)。19世紀に入るとゴシック・リバイバルの潮流のなかでギルバート・スコットによる修復も行われた。

現在のイーリー大聖堂の各部を数値で示すと、聖堂奥行長さ165メートル、西塔高さ66メートル、八角塔高さ52メートル、数ある大聖堂のなかでも巨大な規模を有している。この教会堂は、「沼地の船(Ship of The Fens)」という愛称で親しまれている。遠くからみたイーリー大聖堂は、まさに沼地にぬっと浮かび上がる巨大船のようだ。この巨大空間のなかで、クワイヤー・ボーイズの2人の男の子は天使の声を響かせていたのである。



写真-4 内陣

● ● ● クロムウェルの住宅

イーリーのもう一つの自慢は、清教徒革命の立役者で有名なオリバー・クロムウェル (Oliver Cromwell, 1599～1658年) の住宅がこの町にあることだ(写真-5)。この住宅は13世紀に建てられた木造建築で、何度も居住者が入れ替わり、現在は観光インフォメーションセンターとして公開されている。



写真5 クロムウェルの住宅

クロムウェルは1599年ハンティングドンのカントリー・ジェントルマン(郷紳)の家に生まれた。1620年ロンドンで結婚後、故郷のハンティングドンに戻ってしばらく生活したあと、農業をするために近くのセント・アイヴスに移った。1628年議員に当選すると、クロムウェル一家は1636年イーリーに引っ越すことになり、セント・メリー教会のすぐ近くにあるこの住宅に移り住み、税務署員として働きながら政治家としての地歩を

固めていくことになる。現在、パーラー、キッチン、書斎、寝室などが往時の姿に復元されて一般公開されている。

クロムウェルは議会派の中心人物として、王党派と激しい攻防を繰り返した。1645年ネーズビーの戦いを制すると一気に優位に立ち、ついに1647年チャールズ1世は降伏を余儀なくされる。クロムウェルはさらに王と妥協をはかる長老派を武力によって議会から追放。国王を処刑し、共和政を樹立する。いわゆる



写真6 クロムウェル肖像画

清教徒革命である。クロムウェルはその後、反対派の温床であるスコットランド、アイルランドを制圧し配下に組み込むとともに、議会を解散して1653年みずから護国卿 (Lord Protector) を名乗り独裁制をしくことになる。1658年クロムウェル病死後、チャールズ2世によって王政復古が果たされ旧体制に戻るようになるが、クロムウェルの果たした歴史上の役割はきわめて大きい。



写真7 マーケット

クロムウェルの肖像画(写真-6)や静かな町イーリーの風景から、彼の激動の人生を想像することは難しいが、彼の行動原理の基本は清教徒としての厳格さにあったことを考える時、清教徒の根拠地であったイーリーはまた別の相貌をもつ町としてわれわれの前に浮かび上がってくる。

● ● 市の立つ町 ●

中世の都市にとってローカルな交易の場である市は欠かせない存在であり、都市と農村をつなぐ重要



な結節点としての役割を果たした。日本の中世都市でも定期市の立つ場がそのまま発展して定常的な市町になったり、中世の町場である門前町や宿場町、港町に市が立つことはごく一般的で、おそらくこのことは洋の東西を問わない、中世都市に共通する現象であったと考えられる。

ふだん静かな町も市の立つ日には朝早くから新鮮な野菜やホームメイドのお菓子、乳製品、手工業品などをどっさり抱えて数多くの商人が町に押し寄せる。町は一転して活気溢れるハレの場に様変わりする。

イーリーでは古くから毎週木曜日と土曜日に市が開催され、多くの人々でにぎわった。この伝統はいまも生きており、マーケット・プレースには仮設のテントがたち、さまざまな商品が販売される(写真-7)。イーリーには大ウース川(The River Great Ouse)が流れており、この川が周辺の農村や町をネットワークする動脈であった。そしてこの川を利用して各地から物資が運ばれ、イーリーで荷揚げされたのである。



写真-8 ウース川河畔

いくつかの中世起源のヨーロッパの町を訪ねると、ほどよい幅の曲がりくねった道が縫うように走っており、まるで迷路にいるようだ。しかし町のどこからも教会を望むことができるので、迷子になることはない。そして町の規模と教会の規模はなんとなく相関があるようで、大きな町には巨大な大聖堂が屹立している。フィレンツェのドゥオーモ、パリのノートルダムなどは、大都市ならではの規模を誇っている。

一方、イーリーは町の規模に比べて、大聖堂が完全にスケールアウトしている。町と教会がどうも釣り合っていないのである。町は巨大なモニュメントに寄り添うようにして付属している。こういう都市をイギリスではカテドラル・シティと呼び、メガ・シティの対極的な存在として位置づけていることがわかる。都市は小規模であっても、周辺には豊かな田園風景が広がっている。エベネザー・ハワードの「田園都市 (Garden City)」を生んだイギリスの原風景はこうした地方都市にあることをあらためて思い知らされるのである。

写真-9 中世の町並み

18世紀になって周辺の沼地が干上がり、イーリーがもはや島でなくなると、ウース川はマリナーを備えたボート競技の舞台に変身する(写真-8)。ケンブリッジ大学はここにボートハウスを所有しており、毎年開催されるオックスフォード大学との対抗ボート競技の練習を行っている。

● ● ● 中世の町並み

イーリーの町には中世に遡る建築が数多く残されており、曲がりくねった道を散策するとまるで中世にタイムスリップするような錯覚に襲われる(写真-9)。しかも町はとて小さいから、数時間もあれば町全体をみることができる。

